

京都で出会った人々(時代の転換点)

東京中央新ロータリークラブ 太田 一彦様

本日は京都で出会った人々というテーマでお話したいと思います。私が日本経済新聞社記者として京都に赴任した1981年から1984年は高度成長が終わり、バブルが始まる前の時期でした。いま振り返ると京都の転換点となる時代でした。この時に出会った人々は活力があり、進取の精神に富んだ魅力的な方々でした。私の話を通じて、皆さんに現在の日本を見つめ直していただければ幸いです。



本題に入る前に京都に3年間住んだ印象を述べたいと思います。京都は千年の都であり、歴史と文化と伝統が身近に感じられる街です。もちろん美味しい料理やおもてなしの心は観光や仕事で京都を訪れた人でも感動します。

ただ実際に住んでみると観光で訪れた時とは少し印象を持ちました。盆地なので夏は暑く冬は寒い気候です。必ずしも住みやすい環境とは言えません。街を歩いていると活動的なお年寄りが目につきました。京都市が導入した敬老パスや京都府が嵯峨川三知事時代に全国に先駆けて取り入れた65歳以上に対する医療費助成など恵まれた制度があったからでしょう。

ただ恵まれた制度も安定した財源がないと維持できません。現在の京都市は深刻な財政状況に陥っています。2028年度に財政破綻の危機にあると言われている。最大の原因は地下鉄建設です。私が赴任した1981年に南北が開通しましたが、その後バブル期に建設し、バブル崩壊後の1997年に開通した東西線の負担が重くのしかかっています。私は赴任してまず京都府庁を担当しました。京都府知事は1950年から1978年までの28年間、共産党に支えられた嵯峨川氏が務めました。「憲法を暮らしの中に生かそう」をスローガンにして福祉・環境重視の政策を進める一方、道路・鉄道等のインフラ整備は停滞していました。私が担当した1981年は保守府政が誕生して間もない時期で、政策が大きく転換していく流れを目の当たりにしました。

保守府政の知事となったのは農水省出身で自民党参議院議員から担ぎ上げられた林田悠紀夫さんでした。温厚な人柄で、芯がしっかりと政治家でした。議会の与党勢力が盤石ではなかったため、政策を遂行する上で苦労が絶えなかったと思います。

知事を支える副知事の一人が野中広務さんでした。反嵯峨川府政の急先鋒で保守府政実現の功労者です。対立をいとわず嫌われ役を一手に引き受けて闘う政治家でした。後に中央政界に打って出て自民党幹事長になられたので皆さんもご存じでしょう。

もう一人の副知事は荒巻禎一さんです。自治省出身で中央とのパイプ役を担い、産業振興、企業誘致等に尽力しました。もともと九州出身の方で京都に縁があった訳

ではないので、後継知事になるのは難しいのではないかとおっしゃいましたが、1986年から1998年まで知事を務めました。ちょうどバブルが始まり終焉する難しい時期にかじ取りされました。それまで停滞していたインフラ整備や産業振興などがバブル崩壊前に着実に進行したことが現在につながっていると言えます。

この時期、印象に残った政治家がもう一人います。谷垣禎一さんです。衆議院議員だったご尊父の死去で、弁護士を辞めて急遽、後継として出馬会見された時の姿が忘れられません。そこに居たのは緊張した面持ちで、政治家の道を歩む決断をした悩める人の姿でした。その後、自民党総裁まで上り詰めるとはそのころ予想もできませんでした。

当時の京都の経済人は逸材ぞろいでした。和装産業の重鎮だった西村大治郎さん。伝統産業の発展に寄与しただけではなく、京都の文化・歴史の継承に多大な貢献をされました。

京都密着型企業の代表は島津製作所です。京都に本社を置く有名企業は多々ありますが、大規模な工場を京都に集中させる企業はほとんどありませんでした。島津製作所は大規模な工場・研究所を持ち、京都で多くの雇用を生み出していました。当時社長の上西亮二さんは「島津製作所は創業以来ずっと京都に腰を据えて経営してきた。東京に出ていけば、もっと大きくなって有名になっていただろうが」と自負心を持って地元愛をいつも強調していました。そして技術を重視し多くの有能な人材を抱えていました。田中耕一さんのノーベル賞受賞を機に今では世界的に有名な企業になりました。

府外出身ながら京都に来て成功した経営者も多くいます。代表的な人物が塚本幸一さんと稲盛和夫さんです。塚本さんは滋賀県出身で、反嵯峨川府政の急先鋒でした。林田府政が誕生してからは「京都を変えていく」と経済界の先頭に立って活躍されました。戦争中はインパール作戦に参加し、生き残った数少ない一人でした。悲惨な体験をしながらも「私は生かされているのです」とよく仰っていました。そうした心情がエネルギーな活動を支えていたのだと思います。また昭和天皇陛下への敬愛の情も深く、京都迎賓館の実現に尽力されました。

稲盛さんは鹿児島県出身の方です。当時から多忙を極めていて、京都にいる時間は限られていました。しかし稲盛さんの経営哲学を学ぶ盛和塾は大変人気があり、心酔する多くの方々の熱い思いをよく耳にしたものです。塚本さんと稲盛さんは1983年から2001年まで京都商工会議所会頭を務め、京都経済発展の礎を築きました。

京都にはチャレンジ精神あふれるユニークな企業が数多く多くありました。そして、この時期に大きく飛躍しようとしていました。山内溥社長が率いる任天堂。トランプや花札を古くから販売している会社でしたが、「ドンキーコング」という携帯ゲーム機を新たに発売しました。当時はそれほど大きな話題になりませんでした。これをきっかけに誰もが知る世界的なゲームソフト会社に駆け上がりました。

オムロン創業者の立石一真さんも人間味あふれる方でした。大分出身で地元で福祉工場オムロン太陽を設

立するなど、大所高所の観点から経営を実践していました。堀場製作所の堀場雅夫さんはベンチャー育成に心血を注ぎました。京都にベンチャーが根づき、今の隆盛があるのは堀場さんの大きな功績です。

村田製作所の村田昭さん、ロームの佐藤研一郎さん、日本電産の永森重信さんらは現在のデジタル時代を予見していたような経営者です。数十年前から打ってきた布石が今の成功を生み出しています。先見性のある経営、それも京都の風土が培ったものだと思います。

京都の経済人にはサラリーマン社長にはない人間的な魅力と器の大きさを感じました。こうした経営者の足跡を振り返ることによって、沈滞ムードが蔓延している現在の日本を立ち直らせる機運がまた盛り上がることを願っています。